

最近の症例から (4) ——巨舌症——

氣賀昌彦, 山本雅也, 古澤清文

松本歯科大学 口腔外科学第2講座 (主任 山岡 稔 教授)

西本雅弘, 岡藤範正

松本歯科大学 歯科矯正学講座 (主任 出口敏雄 教授)

患者: 20歳, 女性

初診: 昭和63年1月9日

主訴: 前歯部の開咬

既往歴および家族歴: 特記すべき事項なし

現病歴: 以前より前歯部の開咬を自覚していたため, 本学矯正科を受診した (写真1).

現症: 口腔内所見としては, 舌が大きく舌側縁に歯牙による圧痕を認める. また両側大白歯部および右側小白歯部のみで咬合していた.

口腔容積と比較して舌の体積が明らかに大きく, またセファロ上でも神山の開咬分類 type 2 と type 3 の混合型を示したため, 矯正動的治療および, その後の安定性をはかるために舌縮小術が行

われた.

臨床診断: 巨舌症

Angle class III

Sketal I (ANB+2.0°)

over jet +0.5 mm,

over bite -2.5 mm

処置: 昭和63年3月15日, 全身麻酔下, YAGレーザーにて舌縮小術 (Becker法), 舌小帯伸展術を施行した (写真2, a・b).

術後3カ月の所見は, 舌背縫合部にわずかな陥凹を残すのみとなり舌運動障害, 知覚・味覚障害は認めなかった.

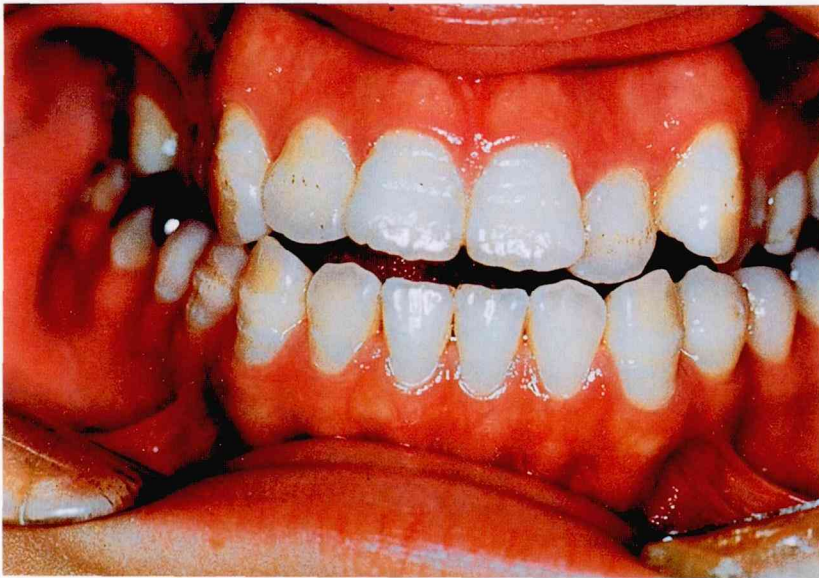
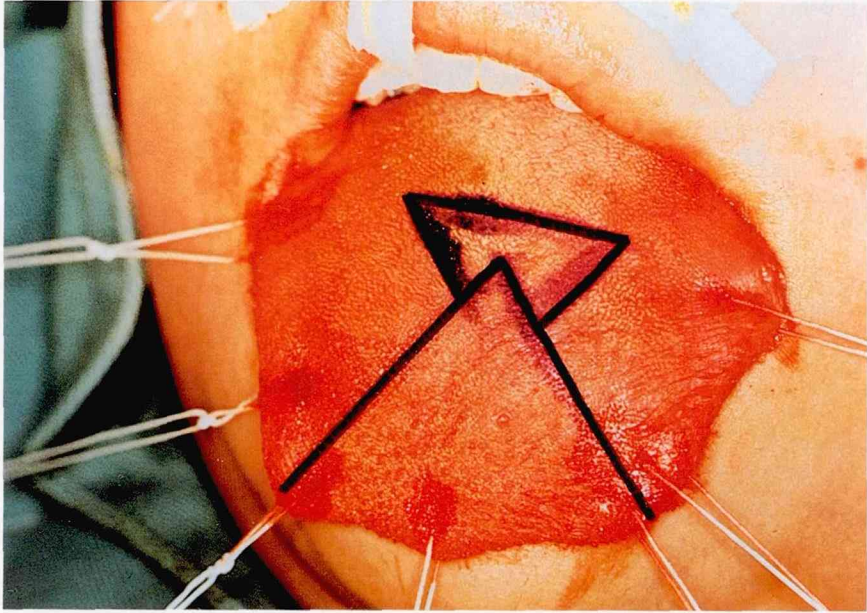
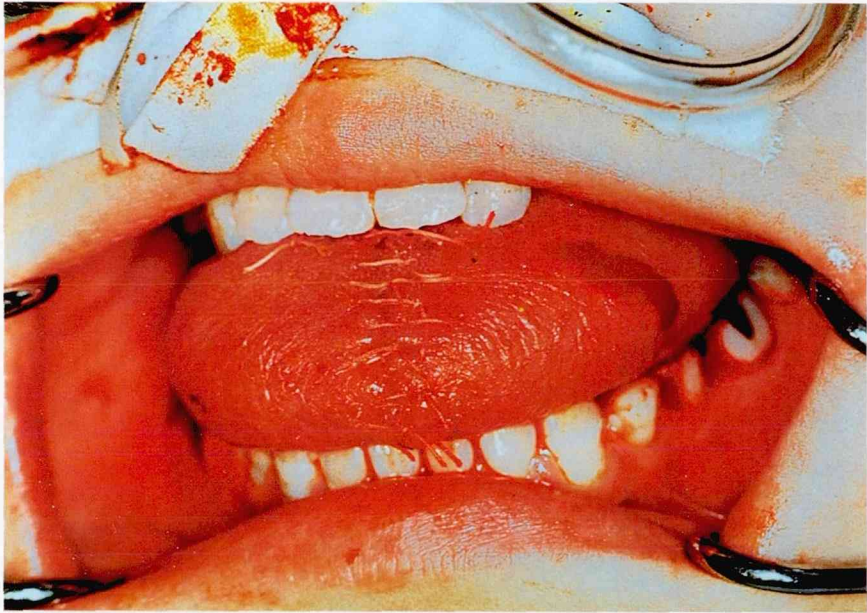


写真: 1



写真：2 a



写真：2 b